

# ムービング・イメージ、それは誰の視線によるものなのか？

●ムービング・イメージに  
囲まれた暮らし

今、わたしたちは映像文化のなかで生活を送っている。電車、飛行機、街頭のディスプレイで、あるいは、家庭のテレビやインターネットを通じてコンピュータで映像を日常的に見ることができている。YouTube（二〇〇五年）、ニコニコ動画（二〇〇七年）などのインターネット上の動画共有サイトでは、豊富な映像コンテンツを視聴することができる。さらに、携帯電話やデジタルオーディオプレイヤーなどで映像を携帯することもできる。内容の質はともかくとして、映像それ自体の量は多くなっている。また、視聴者は機器や場所を問わず、見方法の選択の幅も広げることができるようになった。

を経験、もしくは構築するといっても過言ではない。

●誰の視線によるものなのか？

こうした背景のもと、人文・社会科学におけるムービング・イメージの利用もさまざまな形で盛んになっている。批評だけでなく、撮影、編集、制作、あるいは、デジタルアーカイブズの構築などを自らおこなう研究者も増えている。

人類学には、古くから他者の生活や活動を映像で記録し、表象の可能性をさぐる研究領域があり、民族誌映画が制作されてきた。現在、研究者がフィールドワークの際にビデオカメラを携帯して、研究のための調査資料の収集をおこなうということは、特別なことではない。また、研究成果として映像作品の制作がおこなわれ、近年では、学会などで上映会が設けられることもある。

筆者は、これまでおもに日本の酒蔵にてフィールドワークを展開してきた。最近、フィールドへ行く際には、小型のデジタルビデオカメラを携帯する機会が多い。撮影した酒蔵内の映像を、分析のための資料とし

て、また、編集し、授業の教材として活用するが、撮影する際、常に意識せざるをえないことは、撮影する主体と撮影される主体との関係である。

何を対象とするにしても、撮影対象は単純に客観的な対象ではありえない。そうであるならば、映像が誰の視線によって撮影されたものであるのかを考える必要があるだろう。映像に客観的事実を求めるならば、そのとき、撮る主体と撮られる主体とが断絶した表現が好まれるのかもしれない。しかし、映像はなんらかの経緯を経て、構築されてきたものであることを考えれば、制作の意図やプロセスなどを、場合によっては、映像のなかに提示することによって、あらたな形の映像を作ることができのではないだろうか。ムービング・イメージの時代に求められているものはそういう映像なのかもしれない。



フィールド先である酒蔵の全景(兵庫県明石市にある茨木酒造)

いわたに ひろふみ  
岩谷 洋史  
民博 機関研究員

専門は文化人類学。おもに、日本の酒蔵(清酒業)を対象にフィールドワークをおこない、仕事場で働く人たちの知識や技能、徒弟制に関する研究をおこなってきた。最近は、映像やコンピュータを利用した研究のあり方にも関心をもっている。